

長い沈黙

マリア・ロリニアイテ著 清水陽子訳

トリアの少女 ナチ収容所より還る



未来社

い沈黙

ロニワイテ著 清水陽子訳

未来社



【訳者紹介】

清水 陽子（しみず・ようこ）

1941年生まれ。早稲田大学文学部を卒業後、日ソ学院でロシア語を学ぶ。現在、ソビエト児童文学を読む会、同人「イワン」の仲間と翻訳を勉強する一方、かわさきおやこ劇場の運営に携わっている。

訳書に『ぼくのともしちミシカ』、『友だちになりたいな』（童心社）などがある。

長い沈黙

1990年1月30日 第1刷発行

1990年4月10日 第2刷発行

定価 2060円（本体2000円＋税60円）

訳者 清水 陽子

発行者 西谷 能雄

発行所 株式会社 未 來 社

東京都文京区小石川 3-7-2

電話・03-814-5521

振替・東京 7-87385

組版／ふじ活版・印刷／奈良印刷・製本／富士製本

ISBN 4-624-61021-0 C 0097

日本の読者のみなさまへ

マリヤ・ロリニカイテ

親愛なる日本の読者のみなさま、この本を紹介する機会を与えて下さった、出版社「未来社」にまず、心よりお礼を申し上げます。

作者は、作品の成果をみなさまと共に分かちあえる時にだけ、喜びがあります。私の作品を日本のみなさまと共有していただけることを大変うれしく思います。第二次大戦中、ファシズムのゲットーと二つの強制収容所で過ごした体験の記録である、私の日記『私は語らなければならない』（邦訳『マリーシャの日記』）が一九六六、一九七九年に出版されていますので、これが二度目の出会いともいえます。

ファシストに殺されず、しかも、衰弱のために死なないで生き残れることは、とても可能性の少ない望みでした。それでも、私たちはみんなだれかが生き残って、戦後生きていく人たちに、ヒットラー・ファシストの悪業について全てを語って欲しいと強く願っていました。だから、私は、その時、できるだけ正確にはっきりと書きとめていたのです。

幸いなことに、私はガス室に送られずにすみしました。非常に衰弱していましたが、死にませんでした。私は生き残れたのです。だから、私がみんなの願いを実現するために、何を見たか、何の目撃者

だったかを語りました。この日記は、世界の一八カ国で翻訳されました。

人間の生命を奪うことほど大きな犯罪はありません。それなのに、ファシズムは、第二次世界大戦を始めて、実に、五〇〇〇万人の生命を奪いました。この人数がどんなに多いか考えて下さい。世界の大首都の数都市の人口にあたります！

すでに亡くなった人たちは、侵略戦争、殺人、差別への憎しみや怒りについて、語ったり、警告したりすることはできません。しかし、今でも、これらの問題は存在しています！ だからこそ、私はこのことについてのみ書き続けています。

自分について語ったり、伝記的にまとめることは難しいことです。そこで『私は語らなければならぬ』に続けて書いたまだ紹介されていない二つの小説について、話させて下さい。

小説『三つの出会い』で、私は、ファシズムを人殺しといった恐ろしさではなく、ちがった側面から描写しようと努めました。ファシズムは、精神を破壊させ、人生を歪め、精神を歪めます。特に若い人たちへの影響は恐ろしいものです。占領者どもに共犯者にさせられる子どものアリギス、売春宿に閉じこめられる同級生のイレナ。彼らの人生がめっちゃめっちゃになっていくのです。肉体が殺されなくても、生きながら奴隷になり、人のいいなりにされる、これがファシズムです。

また、小説『光に慣れよ』では、いつ殺されるかわからない人間の刻々とした感情の動き、そして、この緊迫した恐怖感が人間にどう影響し、人間性をどう破壊していくのかを描写しようと努めました。占領下の三年間、若い娘が地下室、屋根裏、森の洞穴に隠れて過ごし、やっと生きのびました。しかし、戦争が終わり、危険が過ぎても、娘は平凡な、ごくあたり前の生活に戻ること、すなわち「光」

に慣れることがどんなに難しかったかを描写しました。

親愛なる読者のみなさん、今、小説『長い沈黙』について、先を越して説明したいとは思いません。でも、これだけはいわせて下さい。極限状態の中で起こり得る問題の一つを描きたかったのです。特に、文字通りの意味で、生と死の選択の問題です。しかも他の人たちの死の上に成りたつ生を。

しかし、これが、私の最後の作品ではありません。近いうちに、『結婚プレゼントかつらい日に』という本がロシア語で出版される予定です。

ファシズムが再び生きかえないように、また、侵略戦争や迫害がなくなるまで、語りつづけないければなりません。あなたの心の中に共感が生まれることを期待しています。

ありがとう！

一九八九年十一月一日



私の略歴

マリヤ・ロリニカイテ

私は一九二七年、バルト海沿岸のリトアニア共和国のクライペダ町の、弁護士の家庭に生まれました。

一四歳までの私の子ども時代は、他の同年齢の人たちと異なってはいません。しかし、一九四一年、ヒットラーのひきいるドイツ軍がソビエト連邦に襲いかかったのです。当時、私たちの家族は、首都のヴィリニウス市に引越していました。このヴィリニウス市がドイツ・ファシスト軍に占領されてしまったのです。私はユダヤ人として学校を追われ、黄色い星をつけさせられ、ゲットーに住まわされました。ゲットーから警護兵つきで強制労働に駆りたてられました。一九四三年に、ゲットーが閉鎖され、母、妹、弟は殺されまし

たが、私は他の娘たちと一緒に強制収容所に送られました。強制収容所では、さらに苛酷な労働と飢え、寒さに苦しめられ、名前の代わりに番号で呼ばれました。はじめの強制収容所では五〇〇七番、次の強制収容所では、すでに六〇八二一番でした。ガス室でも殺されずに生き残った数少ない人たちが解放されたのは、一九四五年三月一〇日でした。

あれ以来、長い年月が過ぎ去りました。私は大人のための夜間学校、そして、文学大学を卒業しました。今は、すばらしいレニングラードに住んでいます。しかし、私にとって戦争はまだ終わっていません。だから、当時のことを書いているのです。過去の戦争や、ファシズムの悪行について知る人が多くなればなるほど、新しい悲劇を許さない人々が多くなることを私は固く信じています。

長い沈黙 目次

リトアニアの少女
ナチ収容所より還る

日本の読者のみなさまへ 一

一 リーダとの再会 三

二 戦争がはじまった 三

三 男性のいない町 四

四 陸軍病院で手伝う 五

五 卒業した！ 五

六 衛生看護兵の訓練を受ける 六

七 前線で見た多くの死 七

八 ドイツの強制収容所へ 二五

九 リーダの脱走！ 二六

十 解放された！ 二七

十一 戦争が終わった 二八

十二 今こそ語らなければならない 二九

「生き残り」の負う重荷とは（黒川万千代） 三〇

——戦争のむごさを問いかける——

訳者あとがき 三一

長い沈黙

リトアニアの少女

ナチ収容所より還る

一 リーダとの再会

もう見ている人もいなくなり、心の平静を装う必要もなくなると、ジェーニャはなおさら辛くなった。一人ぼっちだった。全くの一人で、突然たち戻った過去と向かいあっていた……。

夫のヴァロージャは隣で眠っている。ジェーニャは横になって目を閉じたまま、一生懸命他のことを考えようとしていた。今日入院させた病人のことを考えた。胃潰瘍が悪化したのに、ベッドがないのでまた家に帰さなくてはならなかった、入院予定者のことを考えた。明日、彼をどこに入院させようか？ 近日中に内科からはだれも退院しないはずだ。

すると、また、救急車の担架に付き添って入ってきたリーダーの姿が脳裡に浮かんできた。

ジェーニャはすぐにリーダーだとわかった。リーダーも。とっさにリーダーは喜んでかけ寄ろうとした。だが、前に担架があり病人がいたので、笑ってうなずいただけだった。

ジェーニャはあわてて病人の診察をはじめた。神経を集中させようと努力した。病歴を記入した。姓名。生年月日。症状。手術に関することを記入した。

その間リーダーが隣に立っていた。

病人が別室に運ばれると、リーダーは机のそばに腰を下ろした。すぐ近くだった。

二人が出会ったところで、少しも思いがけないことではないはずだ。ましてや、リーダとはいつかは会えるような気がしていたのだ。

だが、今日、こんなふうに突然だとは……。

リーダは笑顔で話していた。ジェーニャも話していたが、時々ふっと、目の前にすわっている「救急車」の医者であるこの女性は、ドイツの収容所で一緒だったあのリーダとは全然別人であるような錯覚にとらわれた。あのリーダではないと。

だが、間違いなく、あのリーダなのだった。あの頃とはすっかり変わっている。肥っていて白衣を着ている。当時にはなかった皺もある。だが声は同じだ。声だけではなくちょっと伸ばし気味の話し方も変わっていない。今は、口紅をつけている。流行のパールの口紅だ。そして髪の毛はもちろん伸びている。縮れている。きつとバーマをかけているのだろう。

今、夜になって、また、ジェーニャの目の前で二人のリーダが一つに重なったり、離れたりにいる。がりがりに痩せ、坊主頭で、収容所の縞の服を着ていた昔のリーダ。肥っていて白衣を着て、パールの口紅をつけ、白いキャップの下からバーマの髪が出ている今のリーダ。まるで別人だ。だが、ジェーニャは二人を重ねた。今日の「救急車」の医者は、まさしくあのリーダなのだ。

ヴァロージャを起こして話そうか？ 今日の出会いのことだけではなく、全てのことを。まだ結婚したばかりの頃、ヴァロージャに収容所の話をするようにずいぶん勧められた。でも、あの時にはどうしても話せなかった……。

もし今、目を覚まして聞いてくれたら……。